

居心地が親和行動に与える影響

— 他者との関係性に着目して —

○井川純一・五百竹亮丞・中西大輔

(大分大学経済学部・呉みどりヶ丘病院・広島修道大学健康科学部)

目的

他者との関係性が居心地に及ぼす影響について検討した先行研究 (井川, 2017) では、関係性が微妙な知人の場合、すでに関係性が構築されている友人や他人と比較して居心地の悪さを感じる一方、この居心地の悪さが親和行動に結びつくことを明らかにしている。一方、先行研究の調査対象者はアイデンティティ形成過程にある大学生に限定されており、より幅広い世代を対象とした検討が必要とされる。そこで本研究では、他者との関係性 (友人・知人・他人) に着目して、居心地が親和行動に与える影響について社会人を対象に検討した。関係性が近い相手ほど (友人>知人>他人) ポジティブな印象を持つ (仮説 1) が、知人では居心地の悪さを感じ (仮説 2)、居心地の悪さが親和行動を引き起こす (仮説 3) と予想した。

方法

手続き 調査は社会人 (男性 1,038 名、女性 1,042 名、平均年齢 42.24 歳) を対象に Web 調査を用いて行った。質問紙はバスの中で「A さん」に出会うというシナリオを提示し、その状況下における A さんに対するイメージ、居心地及び親和行動について場面想定法で回答を求めるものであった。シナリオは A さんとの関係性 (他人・知人・友人) 及び対性別 (同性・異性) を操作した 6 種類作成した (被験者間要因)。

質問項目 A さんに対するイメージの測定については林 (1974) の特性形容詞尺度を用いた。居心地の測定は既存の複数の尺度から 6 項目を抽出し、改変して使用した。親和行動の測定には、対人ストレスコーピング尺度から 6 項目を用いた。また、回答者の性格特性を統制するため、相互独立の一相互協調的自己観尺度及びコミュニケーション・スキル尺度を用いた。

結果

尺度の分析 探索的因子分析の結果、特性形容詞尺度については 2 因子構造 (社会的望ましさ $\alpha = .86$, 個人的親しみやすさ $\alpha = .82$)、居心地尺度については、2 因子構造 (対人緊張 $\alpha = .83$, リラックス $\alpha = .77$)、親和行動 ($\alpha = .82$) については 1 因子

構造を採用し、それぞれ尺度得点を算出した。

仮説 1 の検討のため、イメージを従属変数、関係性 (友人・知人・他人)、対性別 (同性・異性) 及び性別 (男性・女性) を独立変数とした 3 要因分散分析を行ったところ、個人的親しみやすさ ($F(2, 2068) = 70.49$, $\eta^2 = .06$, $p < .01$) 及び社会的望ましさ ($F(2, 2068) = 61.43$, $\eta^2 = .06$, $p < .01$) において関係性の主効果が認められた (友人>知人>他人)。次に、仮説 2 の検討のためリラックス及び対人緊張を従属変数とした同様の分析を行ったところ、リラックスにおいては関係性の主効果 ($F(2, 2068) = 70.49$, $\eta^2 = .06$, $p < .01$, 友人>他人>知人) が認められたが、対人緊張においては、知人と友人との間に有意差は認められなかった ($F(2, 2068) = 50.40$, $\eta^2 = .05$, $p < .01$, 友人=知人>他人)。仮説 3 を検討するために、親和行動を従属変数、個人属性、性格特性、居心地を独立変数とした重回帰分析を関係性ごとに行ったところ (仮説 3)、リラックスは、友人 ($\beta = .35$, $p < .01$) 及び知人 ($\beta = .19$, $p < .01$) において有意な正の標準偏回帰係数が認められた。対人緊張は、相手が友人の場合には、有意な負の標準偏回帰係数 ($\beta = -.17$, $p < .01$) が認められた一方、相手が知人 ($\beta = .25$, $p < .01$) 及び他人 ($\beta = .48$, $p < .01$) の場合には、有意な正の標準偏回帰係数が認められた。

考察

他人よりもポジティブなイメージを持つ知人であっても、同じ空間を共有した場合には、リラックスできず、対人緊張が高くなる。この結果は、関係性に長期的展望が存在しない他人とは異なるパターンであった。また、関係性が近い友人や知人の場合には、居心地の良さ (リラックス) が親和行動を引き起こす一方、関係性が遠い場合には居心地の悪さ (対人緊張) が親和行動を引き起こす。これらの結果は、対人緊張が現状維持バイアス (status quo bias) を超えて、親密な他者を作ろうとする機能を持つ可能性を示唆した。

引用文献

井川純一 (2017). 他者との関係が居心地に及ぼす影響, 九州心理学会第 78 回大会抄録集。